

幕末明治の写真師列伝 第四十七回 内田九一 その十二

ここで重要なのは、松本良順がいつ大阪から江戸に帰ったという時期である。それを確認してみよう。

「松本順自伝」(平凡社東洋文庫)、「蘭学全盛時代と蘭癖の生涯」(鈴木要吾著)によると、「松本良順は慶応三年二月、慶喜公より乗馬袴を賜り、服部綾男(前長崎奉行)(注1)の馬を借りて東海道を江戸に向かった」とある。したがって、内田九一が慶応2年に江戸に行った際には、まだ松本良順は関西に居たはずであるから、前号①の記述はともかく、前号②は「幕臣松本良順氏(後の軍医総監順氏)特に先生待つ事厚し、」という記述から、松本良順が内田九一を待っていたと解釈できるので、内田九一が慶応2年に江戸に行ったとすると、松本良順はまだその頃は大阪にいたわけだから、時期的に矛盾することになってしまう。ではこの問題をどう解決したらいいのであろうか?

そこでもう一度、「内田九一は慶応二年秋(九月以降)に江戸に行った」と仮説して考えてみると、『故内田九一短歴』に記載されているとおり、「慶応二年に江戸に到着した内田九一は以前に松本良順から教えられたとおり、まずは荷物を最初、築地鉄砲洲の倉庫に預けて、神田和泉橋通の松本良順宅を尋ね、しばらく松本の留守宅で世話になっていた」と解釈すると矛盾がなく、いいように思われる。最初は松本良順の留守宅で世話になっていたが、慶応3年2月頃に松本良順が大阪より江戸の自宅に帰宅すると内田九一と再会したというところだろう。そしてこの頃の内田九一は、松本良順が江戸に戻った後もしばらく松本良順の屋敷にそのまま滞在して、来訪する「大小諸藩幕下の士」を客として写真撮影をしたり、あるいは出張して写真撮影をしていたのであろう。これらのことは、この仮説の補足になるものが六つある。

第一に『故内田九一短歴』の記述に、「式年幕府軍艦回天号東下スルヲ聞キ便乗ヲ乞ヒ始メテ江戸ニ出ツ」「時ニ慶応二年ナリ」とある事。

第二に『野村盛秀日記』(自蔓延元年三月 至明治元年十二月二十日)の慶応2年5月15日の項に、薩摩藩の野村盛秀が大阪で内田九一と会ったことが書かれている。

第三に『土居通夫君伝』の土居通夫の談話として、「慶応二年夏、小曾根は九一を伴って、京都の町奉行大久保肥前守を訪ねた」とあること。

第四に『増訂武江年表』慶応2年11月9日の項に「鉄砲洲稲荷社其の外小祠多し。長さ延べ二十一町余、幅平均して七町余の類焼也。十日昼時過ぎ、京橋手前にて鎮まれり。焼死怪人多く倉庫の焼落ちたるは数を知らず。」とあり、江戸に大火事が起こってこの時に築地鉄砲洲の倉庫も数多く焼け落ちているという記述がある事。

第五には状況証拠ながら、梅本貞雄編『日本写真界の物故功労者顕彰録』(日本写真協会、昭和27年)の「大木宗保」の項に、「旧幕府弓矢御用達、慶応三年頃、内田九一に写真術を学び、専ら友人知己を撮影、唯一の娯楽とした。湿板期の娯楽写真家であった。明治三十五年頃逝去。」とあることから察せられる。この大木宗保は、後に、東京深川で写真をやっていたことから、まず江戸・東京の人と考えてよい。「慶応三年頃、内田九一に写真術を

学び」とあることから、内田九一は慶応3年にはすでに大阪から江戸に移っていたことが伺える。

第六に、岡本種一郎『立花種恭公の老中日記』(財団法人三池郷土館、昭和56年)の、「慶応三年六月十九日」の項に、この当時江戸に居た立花種恭(注2)が日記に以下のように書いている。「慶応三年六月十九日 陰夜雨 今朝 松本良順 内田九一を 余が宅へ招く 写真す 是 写真の嚆矢なり 内田九一は 皇国写真師の 創業者にして 松本良順の誘導による也と」

このことから、慶応3年に内田九一は確かに江戸にいて、松本良順の紹介で幕閣の要人、幕臣の写真を出張撮影の形で撮影していた様子が伺える。

さらに、この大阪時代の内田九一の名が評判高かったことは、篠田鉦造が幕臣の旗本の古老から聞き残した話し(「幕末百話」)の中で、次のように伝えられている。

「写真は長州征伐の時で、私共大手前は御中軍と称して、将軍警衛で、大阪表まで赴きました。大阪表の写真師は、天満橋向の「九一」というがその頃名人でした。」(慶応2年)この記述は前後の内容から慶応2年の第一次長州征伐のことを指していることから、慶応2年8月頃までは内田九一はやはり大阪にいて、撮影に従事していたと思われるのである。

以上のことから、内田九一は少なくとも慶応2年9月以降に大阪を離れたことになり、慶応2年の10月頃に幕府軍艦回天に搭乘して、大阪から江戸に行ったと考えられるのである。したがって『日本写真史年表』などで「慶応二年一月、内田九一、横浜馬車道に移る」とあるがこれは『野村盛秀日記』の記述などから明らかに誤りである。

では誰が内田九一を幕府軍艦に搭乘する労をとったのであろうか。これはまず長崎時代からの経緯、その後のことも含めて、やはり慶応3年2月頃まで大阪にいた松本良順ではないだろうか。さらに推測だが軍艦奉行、勝海舟もこの慶応2年9月まで京都にいたことから、その便宜に関係していたのかもしれない。

注1：服部長門守常純(綾男)(1815~1879)

文久3年から慶応2年まで長崎奉行を務めその後、勘定奉行、海軍奉行並を歴任し、慶応4年正月側衆、翌2月若年寄にすすんだ。陸軍頭。明治維新後に静岡藩に移り、慶応4年5月には沼津に移住して沼津兵学校の設立事務に参与した。重役、軍事掛学校掛、明治3年静岡藩大参事に進み、同6年東京に出て太政官左院に出仕、同10年学習院教授となり、自宅でも漢字塾を開いた。

注2：立花種恭(1836~1905) 幕末・明治時代の大名、華族。

天保7年2月28日生まれ。通称は鐘之助。立花種善の甥。立花種温(たねはる)の養子となり、嘉永2年、陸奥下手渡(しもとど)藩藩主立花家三代。幕府の若年寄、外国奉行、会計総裁などを務めた。明治元年筑後三池に転封。廃藩後は華族学校(現学習院)初代校長。子爵、貴族院議員。明治38年1月30日、享年70歳で死去。

(森重和雄)